

敷田 麻実

④

ナホトカ号事故から幾年ぞ(2)

冷静な対応

対策の基本は冷静

1997年1月7日午後、北安江にある水産会館の会議室は騒然としてい

た。すでに「海に壊滅的打撃」などのセンセーショナルなマスコミ報道で、漁業関係者は高揚していた。県も具体的に何を指示するのかが明確ではなく、懸命に取りひなすが、連鎖反応のように噴出する憤慨は高まるばかりだ。思わぬ

題字は五木寛之氏

口からでた言葉だが、今も適切な言葉だったと信じている。と言いつても当時の会議場では、正直なところこの発言は「せせら笑われ」た。だれもまともな発言とはとってられなかった。役所の若造が、生活がかかっている

海で生活する漁業にかかわる水産課は、ナホトカ号事故で一躍注目を浴び、対策の中心になった。自画自賛ではなく、当時の水産課には練度の高い職員がそろっていた。金融や法令に強いY専門員、許可を始め水

産行政全般に明るいF技師など、いずれも、県庁には珍しく10年以上異動していないベテラン職員だった。彼らは、水産業に精通しているうえに、県庁内の他の部署の仕事もよく知っていた。そのため、職務や自分の専門を超えて、広い視野で対策にあたることのできる

た。すでに「海に壊滅的打撃」などのセンセーショナルなマスコミ報道で、漁業関係者は高揚していた。県も具体的に何を指示するのかが明確ではなく、懸命に取りひなすが、連鎖反応のように噴出する憤慨は高まるばかりだ。思わぬ

た。すでに「海に壊滅的打撃」などのセンセーショナルなマスコミ報道で、漁業関係者は高揚していた。県も具体的に何を指示するのかが明確ではなく、懸命に取りひなすが、連鎖反応のように噴出する憤慨は高まるばかりだ。思わぬ

た。すでに「海に壊滅的打撃」などのセンセーショナルなマスコミ報道で、漁業関係者は高揚していた。県も具体的に何を指示するのかが明確ではなく、懸命に取りひなすが、連鎖反応のように噴出する憤慨は高まるばかりだ。思わぬ

た。すでに「海に壊滅的打撃」などのセンセーショナルなマスコミ報道で、漁業関係者は高揚していた。県も具体的に何を指示するのかが明確ではなく、懸命に取りひなすが、連鎖反応のように噴出する憤慨は高まるばかりだ。思わぬ



15年間勤めた県庁を退職した日、同僚らと(中央後ろが敷田さん) 98年3月、(敷田さん提供)
た。それが大きな力になった。こちらは徹夜続きの事故対策だったが、対応の遅さも含めマスコミや県民から批判されることが多かった。しかし、「最悪の状況で最善の結果を出す」、これが公務員の仕事だと思っただ。また、海とかかわる仕事をしていた、この時ほど「海を守る」とに使命感を感じたことはなかった。県に勤めてから13年目、新春の朝は苦かったが、光っていた。
(金沢工業大学教授)